

江戸時代の朝鮮通信使による瀬戸内海鞆浦・牛窓における風景評価の特徴に関する研究

A Study on Characteristics of Tomonoura and Ushimado in Setonaikai Landscape
Admired by Korean Envoys Diplomatic Missions the Edo Period.

西嶋 啓一郎*・仲間 浩一**

by Keiichiro NISHIJIMA*・Kouichi NAKAMA**

1. 研究の目的と位置づけ

景観・空間計画において、対象景とそれを観る主体との関係の考察は、デザインを進める上での基本的要因になる。本研究では、その一端を明らかにするために、対象景と対峙する主体の状況と、その内面的な風景の捉え方に着目する。

風景認識を心的な現象として捉え、見るものにとつての内面的な風景の生成、すなわち風景に対する意味的な価値付けの過程と内容については、先行研究で、風景を見つめる主体の内面に意味的に価値付けされたモデルの発見、展開、生成が段階的に行われ、風景の生成に至ったことが確認された¹⁾。本論では、その認識をふまえ、江戸時代の朝鮮通信使の紀行文、具体的には、1655年第六次通信使従事官龍翼の『扶桑録』²⁾、1682年第七次通信使訳官金指南の『東槎日録』³⁾、1711年第八次通信使副使任守幹の『東槎録』⁴⁾、1719年第九次通信使製述官申維翰の『海游録』⁵⁾、1748年第十次通信使従事官曹命采の『奉使日本時見聞録』⁶⁾、1764年第十一回通信使正使趙殿の『海槎日記』⁷⁾をテキストにして、これらにあらわされた風景描写と、その土地の現在の景観を比較調査することにより、主体の意識の状態や見られる風景の構図上の条件について、検証・整理することを目的とする。

2. 研究の枠組・分析方法

本論では、朝鮮通信使一行の経路のなかで、瀬戸

内海鞆浦・牛窓で行われた風景の生成を研究対象にする。この両地点は、瀬戸内海の航路のなかで風景を絶賛する紀行文の記述が多く、なかでも鞆浦は、日東第一の形勝（日本で最もすぐれた風景）という評価が歴代の朝鮮通信使の間で固定化された。先行研究による考察においても、『海游録』の記述の分析により、筑前藍島で風景生成の意味的価値付けのモデルが発見され、つづいて、航路が進むにつれて関門海峡付近でそのモデルを著者自身の故郷の風景に照らし合わせるような展開があり、瀬戸内海に至ると、モデルを確信させる要素を風景の中に探し求めるようになり、そして、鞆浦において、ついにその核心にいきあたったことが確認された¹⁾（表-1参照）。よって、この区間は継時的状況下で、移動する主体の内面に、風景生成の意味的な価値付けが確立された地点であると考えられる。

本論では、鞆浦・牛窓での風景生成の意味的モデルが確立されたときの条件を調べるために、3章では、まづ歴代朝鮮通信使がこの両地区で風景の生成をした記述を紀行文から引用・整理し、その時点での主体が対象景と対峙する状況と、風景評価の意味的な価値付けの内容を明らかにする。4章では、現在の鞆浦・牛窓の景観を調査し、朝鮮通信使が評価した対象景と主体の視点場の位置関係を照らし合わせることで、主体と対象景の関係の構図をモデルとして示す。

3. 朝鮮通信使による鞆浦・牛窓の風景評価

(1) 主体の状況と生成された風景

朝鮮通信使の一行は、必ず訪日録、紀行文を編纂し、また、書や絵を使館となった鞆浦福禅寺や牛窓の本蓮寺などに残した（表-2参照）。風景について、

キーワード：景観、イメージ分析

*：正員、九州工業大学大学院工学研究科

(福岡市城南区田島1-4-7 TEL092-821-2331)

**：正員、工博、九州工業大学工学部建設社会工学科

(北九州市戸畑区仙水町1-1 TEL093-884-3112)

歴代の朝鮮通信使が特別に執着したのは、靉浦の福禪寺対潮楼から眺めた瀬戸内海の風景であった。朝鮮通信使一行は、過去の通信使の記録を読み、過去の通信使たちが、賞賛した風景を確認し、さらに賞賛した。この風景は、1711年第8次朝鮮通信使従事官李邦彦によって「日東第一形勝」と称され、現在もその扁額が福禪寺に残されている。「日東第一形勝」とは、日本一の景勝という意味である。琵琶湖、富士山なども見た第8次の一行為は帰路、靉浦で語り合い、対潮楼から見る仙水島を中心とした瀬戸内海の風景を日本一だとした³⁾。このほか、歴代の通信使の風景評価と対象景に対峙する主体との位置関係を表-3にまとめる。

(2) 風景生成の意味的な価値付けの内容

歴代朝鮮通信使の靉浦での風景評価の記述には類型的な意味的な価値付けを読み取ることができる。それは、中国湖南省にある洞庭湖の風景である。洞庭湖は瀟湘八景の地であり、湖畔の岳陽楼から望む洞庭湖の風景は絶景といわれ、古くから中国の文学や絵画に定着した名勝地であった。しかし、朝鮮通信使の人々自身は、中国内陸部のこの名勝地を実際に訪れたことはおそらくなく、漢詩や山水画などで洞庭湖の風景を知っていたと推察できる。したがって、歴代の朝鮮通信使一行が、日東第一の形勝として靉浦の風景を評価したのは、福禪寺対潮楼を岳陽楼に、そして対潮楼から望む瀬戸内海を洞庭湖に見立てたからであるが、しかしその場合の見立てを行った主体は、実際には見立ての元となる風景を見たことはなく、風景評価の意味的価値付け、この場合は神仙境の風景が、主体の内面に生成されていたと考えられる。

4. 朝鮮通信使の風景生成の構図

(1) 現在の靉浦・牛窓の景観と記述の照らし合わせ

靉浦は、福山市中心部から南に14km、現在は観光と漁業の小さな港町である(図-1参照⁹⁾)。靉港の地形は、大きく弓なりになった湾で、東側の湾を囲む岬の先端は、小高い丘になっていて、松林の間から円福寺(申維翰は『海遊録』で、円法寺と記述しているが(表-3参照)、円法寺という寺は靉浦の歴

表-1 『海遊録』の分析

	英前藍島	赤間関	靉浦
視線の方向	島から対岸を望む 島内を散策する	船から岸辺を望む 館舎から対岸を望む	船から館舎を望む 館舎から仙水島を望む
視界・距離	遠距離景が主	中距離景が主	近距離景が主
風景生成のプロセス	モデルの発見	モデルの展開	モデルの確信

表-2 靉浦福禪寺にのこる漢詩、額

漢詩	1711年第8次通信使正使 李鳳
「靉浦上台」	1748年第10次副使 南孝
「東南形勝地第一北高樓」	1748年第10次書記 李鳳
「東南第一勝」	1748年第10次書記 柳道
「東極行舟樓」	1748年第10次書記 洪震海
「果然第一樓」	
匾額	1711年第8次従事官 李邦彦
「日東第一の形勝」	1748年第10次正使 洪浩

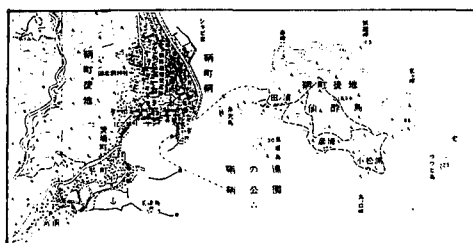


図-1 靉浦

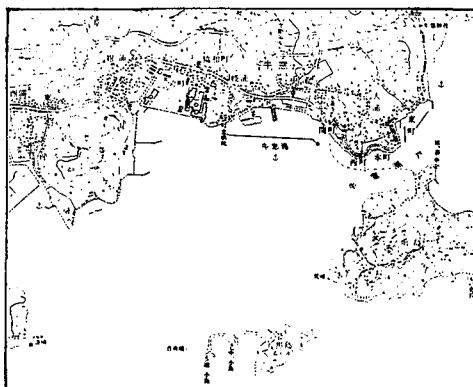


図-2 牛窓

500m 0 500 1000 1500

史には存在せず、円福寺の間違いか)と福禪寺が望まれる。そのさらに東側には弁天島と仙水島、湾の外の西側には玉津島が浮かんでいる。湾内の波はそのため穏やかで、朝鮮通信使が訪れた時代から残る雁木に漁船が停泊していた。町並みは、江戸時代の城下町(町並みの基礎が整備されたのは江戸時代初期の福島正則の時代で、中世からつづく港町が靉城を核につくりなおされた)の趣をいまだ留めており、折れ曲がった細い路地には、本瓦葺きの商家や白壁の土蔵が連ち並んでいる。歴代の通信使は靉浦の賑

の細長い平地に町並みが蛇行しながらつづいている。牛窓港の波止は江戸時代中期の1695年には既につくられていて、東西に687mの長さである。その波止がとぎれた東側には、岬が海に迫り出し、幅400m足らずの水道牛窓瀬戸を挟んで前島が浮かぶ。前島の南西には黒島と二つの小島、百尋礁が浮かび、牛窓湾を囲んでいる。岬の山の中腹には、1655年まで通信使の館舎であった本蓮寺がある。寺の門の前には申維翰が感嘆したと思われる古い蘇鉄が生えていて、本堂の横には、三重の塔がそびえたっている。その山裾の水際に古い家屋がならぶ。町並みの東端ほどに1682年以降の館舎となった御茶屋の跡があり、周囲の石垣に往時の面影をとどめている。歴代の通信使は、鞆浦同様に牛窓についても、任守幹は「民家も鞆浦に比べて一層盛大であった。」申維翰は「湾上の人家は、数千戸はあろう。」とその賑わいを記述している。

(2) 風景生成の構図

前節での鞆浦・牛窓の景観の現地調査を以下にまとめるとめる。

イ) 歴代の通信使が訪れた鞆浦・牛窓は、瀬戸内海の航路上でも最も賑わいのあった都市で、逗留した館舎はその賑わいの周辺部に位置した。

ロ) 館舎の背後は南斜面の山が背景としてあった。

ハ) 館舎の周辺には、松や蘇鉄の老樹が植生していた。

二) 館舎は港口に位置し、近距離景・中距離景に大小の島を望むことができ、南側遠距離景に瀬戸内海が広がっていた。

イ) ~二) を図-3にまとめる。

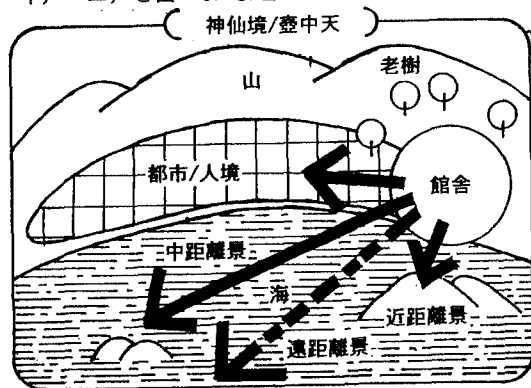


図-3 瀬浦・牛窓での風景生成の構図モデル

5. 結論

本研究により得られた結論は以下の通りである。

1) 朝鮮通信使の紀行文においては、風景評価の意味的な価値付けが主体の内面において確立した場合、

a. 風景生成における主体は、その価値付けの核心を探すために、対象景の細部の要素を眺めるようになり、そのため、視点場位置は対象景と近距離景の関係になることが多い。

b. 風景生成における主体は、価値付けを強化するための特定の風景要素を探すようになり、その意味的価値にそぐわないものは、見過ごされる傾向にある。

2) 歴代の朝鮮通信使によって生成された瀬戸内海鞆浦・牛窓の風景には、以下の構図条件があった。

a, 主体の視点場は、人の住まう場所、つまり人境とその前に広がる自然との縁が接する所に位置し、その場所のイメージの骨格を神仙境として、意味的な価値付けを行った。

b, 主体は、その視点場から望む対象景の空間の視覚像に対して、風景の生成を行った。

【参考文献】

- 1) 西島啓一郎：江戸時代の朝鮮通信使による風景認識と体験記述の特徴に關する研究，日本造園学会誌 62 (5)，1999. 3
- 2) 南龍興，若松實訳：扶桑錄，日朝協会愛知県連合会，1991. 12
- 3) 金指南，若松實訳：東槎日錄，日朝協会愛知県連合会，1990. 2
- 4) 任守幹，若松實訳：東槎日記，日朝協会愛知県連合会，1993. 9
- 5) 申維翰，松茂彦訳：海游錄，東洋文庫，1974. 5
- 6) 曹命采，若松實訳：奉使日本時聞見錄，日朝協会愛知県連合会，1993. 10
- 7) 趙載，若松實訳：海槎日記，日朝協会愛知県連合会，1995. 2
- 8) 西田正憲：瀬戸内海の発見，中公新書，1999. 3
- 9) 磯田重光：地埋院，平成8年5月1日発行の25000分の1地形図より転載。

表-3 朝鮮通信使の靑浦の風景評価のまとめ

	主体の状況	視界・距離	風景評価
1665 年第 6 次通信使従事官南龍翼による『扶桑録』	船で靑浦に向けて航行する	船上から対岸を望む 近距離景	…鐘の音は随々として半ば空中に在る如くなので、此れを聞くと海潮山磐台寺である。寺僧が窓を開いて座っているのを見ると神仙のようであった。
	福禪寺に滞在する	館舎から瀬戸内海を望む 中・近距離景	海吟山福禪寺に宿所を定めたが、高く広々として明るいが比部べくもなく、清海を俯瞰して眼界が千里だけでなく、遠くは伊豫・讃岐の凡ての州と近くは電戸・尾路等の島が天の果てに随々として雲の間に明滅していた。…もし海路の景色を論ずるならば正に此処を第一と為すべきであり洞庭湖と互いに雄を争うべきものである。
1682 年第 7 次通信使訳官金指南による『東槎口録』	靑浦に入港し、福禪寺に向かう	港から徒歩で福禪寺に向かう途中の近距離景	高樓や大きな建物が、碧海を俯瞰しており、層をなしている岩と絶壁は、恰も綿の屏風を張り巡らしたようである。海と山の絶景が、今まで通って来た中では一番である。
1711 年第 8 次通信使副使任守幹による『東槎録』	靑浦に入港したが未だ下船していない	船上から靑浦の市肆を望む 中・近距離景	民家が甚だ盛大で店舗もまた多かつた。館所は即ち海岸の福禪寺であり、海に臨んだ高台で視野は広くて景色が甚だ美しいという。
	牛窓に入港し、御茶屋に向かう	港から徒歩で館舎に向かう途中の近距離景	館の前に海水が階を洗めたり、山は墨で描いた屏の如く取り巻いて、其の境界は全く奥深く景色もまた絶勝である。民家も靑浦に比べて一層盛大であった。
1719 年第 9 次通信使製述官中維翰による『海遊録』	船で靑浦に入港する	船上から靑浦港を望む 近距離景	海岸は山高く秀でて海に臨み、三面は諸山が相控えて湾をなす。山の根が海に浸っているところは、石を削って堤となし、その平整なこと裁断した如くである。松、杉、橘、柚などの巨果の林が、蒼翠として四方を擁し、それらが水面に倒影す。人みなここにいたると、第一の観望りと主張してゆずらない。その東の峭壁は、海に入って峻立し、崖を穿ちて路を通じ、石を築いて台となす。台の上には層軒翼衛が起ち、白壁が雲表に照りかがやく。名は円法寺という。船上からこれを望めば、あたかも神仙の居るところのように見えた。
	船で牛窓に入港する 御茶屋に滞在する	港から牛窓の地、形を望む 中距離景 館舎付近の近距離景	通かなる山は湾を控え、景観が爽潤である。 西に港口を穿ちて一舎を設け、絶勝である。
1748 年第 10 次通信使従事官曹命采による『奉使日本時間見録』	靑浦に入港し、阿弥陀寺に向かう	港から徒歩で阿弥陀寺に向かう途中の近距離景	波止場から館所までは殆ど半里足らずであり、席を敷き詰めて少しも土が露出しておらず、道の両側には家毎に皆提燈を一つずつ掛けていた。左右の店屋は簾で覆って外に出て見物する人は一人も居ない。その規模が通過してきた所とは頗る異って、繁華で豊盛なことが赤間関より優れて、所謂福禪寺は前から使臣の行旅の時には此処に留まったが岳陽樓と比肩する所である。
	御茶屋に滞在する	館舎から瀬戸内海を望む 中・遠距離景	捲き上げると即ち海の景色が広くて静かであり、恰も漢水のようにある。
1764 年第 11 次通信使正使趙による『海槎日記』	靑浦に入港し、福禪寺に向かう	館舎付近の近距離景 館舎から瀬戸内海を望む 中・遠距離景	館舎は即ち海岸山の福禪寺であった。前後の使使たちが皆靑浦を日本沿路の第一勝景だと言ひ、或いは洞庭湖に比べ或いは岳陽樓に比べた。洞庭湖と岳陽樓はまだ見たことがないので其の優劣は評断できぬが、当地は三面が海に囲まれており南を望めば果てしなく、東・西側の小さな島は悉く手を携えいしゃくをして媚態を呈しているようであり、寺は岸の上に在って奇巖が隅隅を取り巻いており、石の梯子が互いに連なっており屋根が高く聳えて爽快であり広々としており、思うに此れは誠に好い江山・樓台である。

わいについて、申維翰は「これまた赤間関以東の一都会」、曹命采は「繁華で豊盛なことが赤間関より優れて」と記述している。港から町並みを抜けて石畳の坂道を上ると、福禪寺対瀬瀬が小高い丘の上に海に向かって建っている。そこからは、西に靑の町の賑わいを見下ろすことができる。また東側には、すぐ目前に仙水島、弁天島が見え、南には瀬戸内海が遠くまで拡がっている。

牛窓は、靑浦から直線距離で東に約75kmに位置し、江戸時代は瀬戸内海の重要な海駅として栄え、幕府が朝鮮通信使の迎接所として指定した特別の地である。現在も牛窓には、海遊文化館に朝鮮通信使の史料が保存され、秋季の祭礼では、朝鮮通信使に起源を遡ることができる唐子踊りが行われる観光の町である（図-2参照⁹⁾）。地形は、背後の山が海に迫り、岸に沿って東西に浜がのびている。その浜と山の間